からこかぎ

第６号　平成 25 年 11 月 12 日（火）発行

唐古･鍵遺跡の保存と活用を支援する会
〒636-0247　奈良県磯城郡田原本町阪手 233-1　青垣生涯学習センター唐古･鍵考古学ミュージアム内
TEL 090-9257-3688　Email：karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

（寄稿）　地域ボランティア考－永住の地、奈良

会員　渡辺　やす子（東京都在住）

今、移住・定住支援、そのための情報提供を行なう自治体が増えている。多くは過疎という現実に直面する地域からの発信であり、移住者を迎えて地域の活性化を図ろうとする共通の目的をもつ。

ところで、福島第一原発事故による放射能汚染のために、周辺の飯館村や浪江町の人々は、何代にもわたって住み慣れた父祖伝来の土地を離れ、初めての土地で不便な生活を余儀なくされている。人々に永住という意識は無くても、事故が起きるまではここでの暮らしが当たり前のようにいつまでも続くはずであった。

数年前、友人の N さんは、東京から田原本町に近い土地に生活の拠点を移してしまった。永住の意志は確かめていないが、少なくても福島の人々とは異なり奈良を積極的に選択してのことである。

広辞苑によれば、永住とは「永くその土地に居住すること。ある土地に移り、死ぬまでその地で生活すること」とある。同義語には、「安住」がある。安住は「現にある境遇に満足して安んじてとどまること。何の心配もなく、落ち着いて住むこと」である。つまり、永住するにはこのような安住できる環境が必要であり、飯館村や浪江町の人々は永い年月をかけてそうした環境を作り上げてきたはずであった。

2011 年 3 月 11 日、三陸地域の人々は、東日本大震災が引き起こした大津波に見舞われ、それまでの安定した生活を根こそぎ覆された。今年7月、私は、宮城県気仙沼を中心に被災地を歩いてきた。1年ぶりである。

気仙沼では、震災で大きな被害を受けた小学校の校長先生に、津波が押し寄せたときの状況とその後の経過を語っていただいた。その大谷小学校は、町の中心部からは少し離れた、豊かな里山が残る土地にある。過去の経験から津波がどのように押し寄せるかを予測した先生方は、すばやく高台にある中学校に子どもたちを避難させた。地域の人々が避難したのは、やはり集落より上にある2つの寺であった。

2013 年 7 月現在、小学校の校庭にはまだ仮設住宅が立ち並ぶ。入居者はすべて、大谷地区で被災した顔見知りの人びとである。不便な仮設での生活であるが、その点は他の仮設住宅に比べて恵まれていた。今、地域の人々は、校庭を使えない子どもたちのために、畑地を整地して運動場を作ろうとしている。津波に立ち向かうこうした活動を可能にしているのは、人々が長い時間をかけてお互いに培ってきたかけがえのない地域の力であり、コミュニティーの存在である。

もし、私が永住できる土地を探すとしたら、地域のコミュニティーが存在し、さらに里山的な自然環境が守られている土地が候補になる。もちろん奈良は、第一にあこがれの土地である。しかし、どこで住むにしても、自分が地域にどのように関わっていくのか生き方が問われていることを、震災後、特に意識するようになっている。

弥生遺産展

○　平成 25 年 11 月 16 日(土)～
　　12 月 23 日(月・祝)

○　田原本青垣生涯学習センター
　　2階会議室(特別展示室)

（特別寄稿）　倭建命　望郷の歌

唐古・鍵考古学ミュージアムガイド　鈴木　正三

下記は古事記の倭建命の望郷の歌。東国で蝦夷討伐しての帰途、伊吹山の神の怒りで病気になった時に詠まれたうた。

原文（よみくだし）
やまとは　国のまほろば
たたなずく　あおかき
やまこもれる　やまとしうるわし

いのちのまたけむ人は
たたみこも　平群の山の
くまかしが葉を　うずにさせ　そのこ

訳文
やまとは美しいところ
青々とした垣根のように
重なり合った山に包まれた　やまとは美しい

命の無事な人は
いく重にも山に囲まれた　平群の山の
樫の葉をかんざしに　刺すがよい　無事な人たちよ

著名なジャーナリストA氏は「観光学」講演で、このうたの意味を、下記のように話された（小生が聞き取り理解したかぎりだが）。
前半部：故郷の大和は美しい。
後半部：戦いに生き延びた若者達よ（部下の戦士）
山に囲まれた美しい故郷はもうすぐだ。平群の山の樫の葉を頭にかざし胸を張って誇らしく帰ろうではないか。

この歌は東国遠征の帰途、伊吹山周辺で詠まれたものだが、伊吹山から大和に帰る時、なぜ平群に行く必要あるのか不思議であったが、最近　桑名市にも平群という地名があり、平群神社もあることが判明した。桑名にあれば、伊吹から大和への帰途に通過することは不思議ではない。

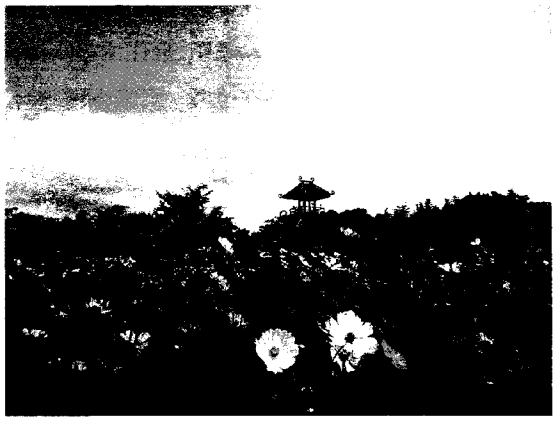
著名な前半部は後半部を述べんがためのもの。全編が望郷の歌。特に後半部の表現は率直にしてみずみずしい。部下への思いやり、故郷が近いという安堵感があふれている。

樫の葉を頭にさして帰るということは、故郷に錦を飾るということであろう。著名な前半部に続き、このような意味の後半部が続くということを、知りえたのは幸運であった。

（注：A氏の講演はレジメなし。上記原文・訳文は、梅原猛氏、三浦佑之氏の著書より）。

小生は唐古鍵の博物館で解説した後、お客様に必ず廊下に出ていただいて、この歌の前半が壁にある前で説明しています。おおむね好評です。

博物館のある場所は、大和の青垣の全貌（東側だけだが）を見るに絶好の場所です。これを宣伝することは、田原本町の為にもなると考えます。今博物館のある建物の屋上を展望台にすれば東西の青垣が展望できます。この盆地で日本が出来た等と言うと、日本中の小中学校が見に来るのでは！と夢想しています。

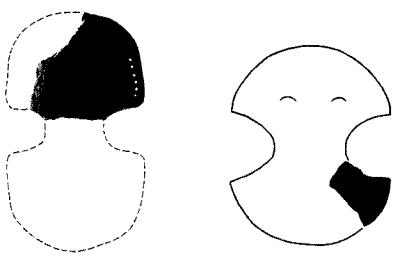


今年も、1万本ものコスモスが、遺跡に咲きました。

遺物紹介(2)―分銅形土製品

会報編集メンバー

今回の「ミュージアム遺物紹介」は、第1室「まつりといのり」のコーナーに展示されている第48次調査(平成3年度)で出土した板状の土製品です。秤の重さを量る分銅に似ていることより分銅形土製品と命名されています。遺跡東側の調査区からの出土品です。「唐古・鍵考古学ミュージアムコレクション3号」に写真とともに詳しく説明が記載されています。更に、2011年の発掘速報展で紹介されました第22次調査(西地区)の再整理事業で6分の1程度の破片(無文様)1点も見つかっています。



(田原本町教育委員会提供・左第48次・右第22次)

分銅形土製品は、弥生時代の中期中葉～後期前葉に、西日本一帯に分布し、後期になるとその数も減少し弥生墳丘墓が出現する時期にはみられなくなります。出土例は、700点程度と数えられ、ほとんど破片で出土しており、唐古・鍵遺跡の出土が東限と見られています。なお、平等坊・岩室遺跡(3点)でも出土しています。

分銅形土製品は、人物の笑顔が想定され、良質な粘土が使用されています。また、表面は、刺突文ないし櫛描平行沈線で形づくってあり、裏面は無文です。上縁に貫孔があります。

展示されている唐古・鍵遺跡の出土品は、残存長6．89cm、厚さ0．86cmの破片で、上半部右側縁辺に6個の小孔があります。しかし、分銅形土製品の特徴とされる笑いを伴う人面が表現されていません。

少し古いシリーズですが、「弥生文化の研究8」によると、分銅形土製品は4種類に型式分類され、人面表現のあるものは上半部の最大幅が10cm未満のものが多く(Ⅰ類B)、更に10cmを超える小孔のあるもの(Ⅰ類A型)は人面表現が無いということです。唐古・鍵遺跡の出土品は、破片ですので、その全体の大きさは不明ですが、残存面の大きさと人面を表さないことより、Ⅰ類A型に該当すると思われます。

分銅形土製品は、中期後半を中心に吉備地方に多く出土(40％を超える)していることより、この時期の祭祀は、より地域性を具備してきたといえます。また、東限と評価される唐古・鍵遺跡で出土したことは、吉備地域からの搬入土器が中期後半から目立ってくるとの報告と符号しており、その交流の一端を示すものといえます。但し、少数の出土例から、その祭祀そのものを受け入れたとは考えられません

「弥生文化の研究」によると、Ⅰ類A型の上半部と下半部のえぐり部分に着目して、えぐりが土製品を顔に当てた時の眼の位置に相当するとし、上部の小孔には、頭巾を取り付けたと推測しています。いわゆる「仮面」説です。因みに、小型のⅠ類B等は、「護符」としての用途を想定されています。

一方、人面的特徴に着目し、縄文期の土偶や土版にその祖形を見る考えもあります。

しかしながら未だ定説はありません。ただ、祭祀具としての用途を想定していることは共通意見です。

弥生期の祭祀具の中で人的な表現を採用する遺物は多く、分銅形土製品をはじめ木偶(岩偶)、人形土製品(弥生土偶)、絵画土器(人面)等が列挙されます。そこに共通している点は、全身表現でなく顔面等の部分を強調したものが多いことです。しかし、そこに表されている祭祀観念は未だ不明です。今後の発掘成果に期待したいものです。

(町文化祭火熾しコーナー)

遺跡紹介(2)―十六面・薬王寺遺跡

弥生勉強会世話人グループ

今回の遺跡紹介は、「十六面・薬王寺(じゅうろくせん・やくおうじ)遺跡」です。今年9月14日に現地説明会(田原本町教育委員会)が開催されました。その詳細は、別添の現地説明会資料に記載されていますので、過去の田原本町教育委員会等の発掘成果を中心に遺跡の概要をご紹介いたします。

1　十六面・薬王寺遺跡の概要

遺跡は、田原本町の西部に位置し、近鉄橿原線田原本駅から北西に1．1kmにあり、大字十六面と薬王寺それに西竹田地区にまたがる遺跡です。標高46～47mと唐古・鍵遺跡とほぼ同じ標高にあります。奈良県遺跡地図では、おおよそ南北1000m、東西840mの範囲を示し、弥生時代から古墳時代の集落や古代の水田跡が検出される複合遺跡と評価されています。

珍しい地名ですが、遺跡の西南部に位置する十六面地区は、寛永年間に保津、西竹田村(大和猿楽発祥地、円満井(えまい)座の系統を受け継ぐ金春座があった)等から分村し、地名は十六個の能面が天より降ったという言い伝えがあり、また遺跡東南部にある薬王寺地区は、中世に薬師如来を安置する薬王寺(やっこうじ)があったことに由来しているようです。

2　調査

1981年の国道24号線橿原バイパス建設に伴う第1次調査から、現地説明会が開催された第31次調査まで継続して発掘調査が進められています。

特に、第1次調査(橿原考古学研究所)では、古墳時代中期の土坑25基が検出され、土師器・須恵器とともに製塩土器・木製品・鉄製品・玉類も出土し、古墳期を中心とした遺跡と考えられています。

最近では、第30次調査で、古墳時代前期後半の竪穴住居(5棟以上)のほか井戸(1)・土坑(5)が検出され滑石製臼玉や管玉の製作住居跡が検出され県内では古相に属する玉製作遺跡として注目されています。

過去の調査で判明した幾つかを発掘報告書をもとにご紹介します。

(1)　旧河道

第1次調査で遺跡中央部に幅100mの河川跡が検出されました。砂礫層分析の結果、花崗岩を主とする旧初瀬川と比定されており、現在は、寺川と飛鳥川(西700mの地点)の間に遺跡は位置していますが、当時は、唐古・鍵遺跡と同様に旧初瀬川が形成した微高地上に立地していたことが判明しました。但し、旧初瀬川水系としても唐古・鍵遺跡と流路が異なると考えられています。

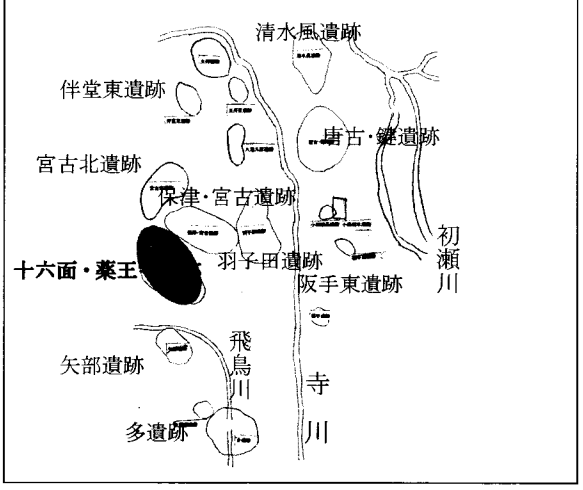
(2)　集落域

第1次北側調査区から弥生中期後半から後期にかけての遺構―大溝(1)中溝(1)井戸(1)－が検出され、特に大溝は環濠に匹敵する規模としてその西側一帯に集落の可能性が指摘されました。しかし、その地域の発掘がすすんでおらず全容は分かっていません。今後の発掘の成果が期待されます。

(3)　弥生期からの墓域

集落域に比べ、墓域は明確になっております。遺跡南側の第27・28次調査では、弥生中期中頃の方形周溝墓2基や古墳前期の方形周溝墓1基が検出されており、それ以前の調査地点からは古墳前期の方形周溝墓2基、庄内～古墳後期の土器棺墓や円形周溝墓、古墳(24次)も検出されており、墓域は埋没河川の上層に古墳後期まで継続して維持されていたことが分かりました。因みに、遺跡北西側端部の第31次調査でも方形周溝墓が検出されていますが、遺跡南部の墓域とは500m以上の距離があり、周辺の保津・宮古遺跡や宮古北遺跡との関連が注目されています。

十六面・薬王寺遺跡周辺遺跡地図



第８回　弥生勉強会に参加して

植田　洋高

今年は例年にない酷暑になりました。第8回弥生勉強会は、田原本青垣学習センター2階研修室で勉強会（座学）のみ開催されました。今回のテーマは、第1回弥生勉強会（平成23年12月4日）で訪れた「平等坊・岩室遺跡」を中心に唐古・鍵遺跡との関連性、弥生勉強会で訪れた奈良盆地の遺跡との比較など、改めて深く勉強できる機会となりました。

平等坊・岩室遺跡は、弥生前期から古墳時代前期初頭まで継続する大規模環濠集落遺跡で、唐古・鍵遺跡よりもひとまわり小さい大きさです。

(1)　方形区画溝から住居域をみる

第8次調査区域の一辺30m前後の（後期環濠配置の中心施設）方形区画について首長層の形成過程の重要施設として、他の方形区画遺跡との比較について説明を受けました。

(2)　方形周溝墓から墓域をみる

第8次調査から北辺、第28次調査地点で、中期中葉の12基（方形周溝墓）、北東側400ml前栽遺跡第3次調査で中期中葉の5基（方形周溝墓）が検出されました。集落の北側に位置し、自然流路の内側で環濠帯の外側に墓域の可能性があり、唐古・鍵遺跡周辺の方形周溝墓も環濠帯の外側で検出されています。

(3)　水田祉から生産域をみる・金属器

集落南部第30次調査の下層遺構から前期の水田祉、上層遺構から中期末の板状鉄斧が出土しています。

中西・秋津遺跡、玉出。萩之本遺跡など弥生勉強会で訪れた水田祉との比較、水田発展段階の地形、排水など勉強することができました。

今回の勉強会は、普段から疑問に思っていたことも質疑でき、藤田先生から詳しく説明いただき有意義な勉強会になりました。ありがとうございました。

恒例のしめ縄づくり

今年も例年のとおり、しめ縄づくりを下記のとおり実施します。どなたでも、しめ縄を作れます。
奮って、ご参加ください。

日　時　12月26日（木）　午前9時30分～
場　所　田原本町青垣学習センター
　　1階　工作室
費　用　会員無料
（非会員の方は、材料費500円をお願いします）

吟醸酒と長期貯蔵酒

植田　洋高

（はじめに）

フルーティーな香り、きめ細やかな味わいの吟醸酒。それは私たちの清酒のイメージを大きく変えました。吟醸酒、純米吟醸酒の出荷量は、年々増加しており、近年では合わせて清酒全体の8％を占めるまでになっています。「吟醸」とは文字通り「吟味して醸造すること」であり、お米を選ぶ段階から火入れをして製品となるまで、すべてに造り手のこだわりが詰まった、清酒醸造技術の集大成と言えるものです。また、清酒は長期間貯蔵し、熟成させることで複雑な香味が生まれます。長期貯蔵酒は、この独特な香味を楽しむお酒です。

（吟醸酒）

昭和初期には、米の表層部をしっかりと削れる竪型精米機が開発され、醪（もろみ）を冷却する装置が普及しました。その後、芳香成分の生成に優れた酵母を使うようになり、酒造りは極限を極めていきます。原料米が不足し、お米の半分以上を削り取るという贅沢な造り方ができなかった時期もありました。しかし技比べの酒であった吟醸酒のすばらしい品質は、次第に一般の方々にも知られるようになりました。よいお酒を求めて誕生した吟醸酒は、1980年代に商品として普及し、私たちをたちまち魅了していったのです。

（長期貯蔵酒）

江戸時代には甕などに入れて何年も貯蔵した清酒が珍重されていたという記録があります。いろいろなタイプの清酒を楽しむという動きの中で、貯蔵で生まれる独特な味わいを持つ長期貯蔵酒（長期熟成酒）に力を入れる蔵元が増えています

第9回弥生勉強会のご案内
ー　竹内遺跡と葛城市の弥生遺跡

井上　知章

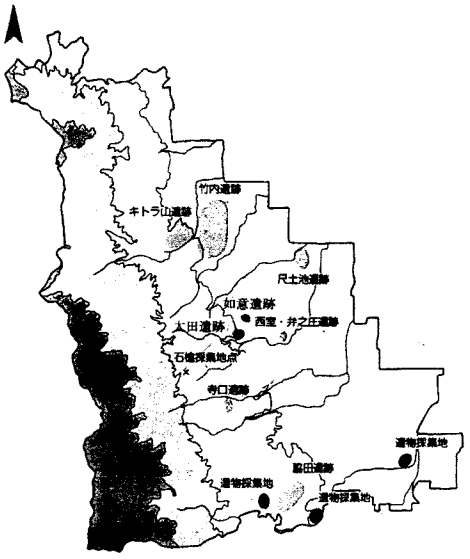
1　竹内遺跡等

第9回弥生勉強会は、初めて奈良盆地の南西部方面に出かける予定です。その地は、古くから河内と大和を結ぶ地理的条件により竹内（たけのうち）遺跡を中心に大正期から着目されていました。石野博信先生は、前期から後期に及ぶ遺跡の継続性に着目し、「歴代遺跡」と評価され、寺沢薫先生はその流通の要衝地として葛下川水系の「母集落」と指摘されていました。しかし、最近は弥生期の遺構面の検出が少ないことよりその拠点集落としての評価に疑問を持つ意見もあります。

現在、葛城市内の弥生期の遺構の確認できる集落は11ヶ所7遺跡と報告(平成17年葛城博物館春季企画展図録)されていますが、いずれも発掘面積が限られており、竹内遺跡を含めその実態は明らかになっていません。しかし、立地条件を考慮すると、弥生期の重要な遺跡として避けて通ることはできない遺跡群と考えています。

今回は、竹内遺跡と脇田遺跡を中心に、寺口遺跡、太田遺跡、西室・弁之庄遺跡、更に高地性集落と評価されているキトラ山遺跡、寺口千塚古墳群(下層)等を確認したいと考えています。

以下は、地域の代表的遺跡である竹内遺跡を中心として述べます。



2　地理的条件

竹内遺跡(南北1km東西500m面積50ha)は、葛下川の支流の熊谷（くまたに）川の堆積によって形成された扇状地に位置しており、縄文期から奈良期にいたる複合遺跡ですが、特に、西日本においては橿原遺跡と同様に縄文期の代表的遺跡と評価されています。縄文前期から活動痕跡が認められた理由としては、サヌカイトの採取地である二上山に近接していることによりますが、西は大阪湾、南は紀ノ川を通じて瀬戸内海と直接につながる可能な位置関係にありヒト・モノ・情報の入手が可能な位置関係にあったからともいえます。

3　調査履歴

主として県道山麓線の建設に伴う事前調査を中心としてなされ、当麻寺参道を軸に集落の動向が評価されています。参道の北エリア（縄文晩期から弥生前期新段階の活動域）、南エリア(縄文晩期の活動域)及び竹内街道交差点北西エリア（弥生期の積極的な活動域）に分類されます。

それらの集落の活動域の推移を現地で確認する予定です。さらに、重視したいのは、竹内街道奥のキトラ山南麓地帯（旧當麻町第22次調査地点）です。そこは、弥生期中期前半を中心とした弥生期の集落痕跡が認められています。 同報告書では、土器の器種は甕の占める割合が多く、その中でも在地形の土器が圧倒的に多いということです。搬入土器としては生駒山山麓を含む河内地域の土器は少量で、紀伊地域の影響を受けた土器が目立つとされています。

今回は、地理的条件を踏まえ、「流通」という視点で遺跡を捉えて見たいと考えています。

遺跡清掃のお知らせ

日　時　12月11日
時　間　10時～11次
集合場所　ボランティア室

古代ものつくり教室から―翡翠加工 編

山本 淳史

メンバーさん達が翡翠加工にチャレンジしました。きっかけは池辺さんのご好意で翡翠の小片を多数手に入れることが出来たことです。糸魚川産ではないと思いますが、でも美しい翠色や透明感が有ります。そのままの姿でも十分なのですが、涙滴型の大珠、あるいは勾玉にと皆さんの好みの形に整えました。しかしアクセサリーとして使用するには、今も昔も懸垂用の孔が要ります。今回は穿孔長が浅いので、現代の利器・小型のミニルーターで孔をあけました。それでもあと1mm ところで何日もかかり、多くの人がいらいらを感じたことと思います。破損させる失敗も幾度かありました。でもこれを乗り越え、貫通直前の美しい翠色をみた、多くのメンバーさんに充実感があったと思います。まだ少し翡翠が残っています、ご希望があれば連絡ください。

さて、玉作りの歴史ですが、「モース硬度7の翡翠」穿孔方法の一例が、富山県埋蔵文化財センターに、弥生後期「江上 A 遺跡(玉造遺跡)」出土の弓と鳴子状木器が玉作道具として展示されていました。この穿孔の仕組みは、寺村光晴先生の玉造に関する本を引用して、説明します。

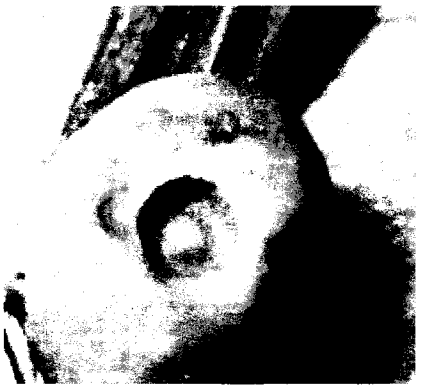
「江上 A 遺跡の穿孔は、鳴子状木器に翡翠を取り付け、弓で管を付けた錐を回転させる方法です。管は竹あるいは骨(鳥の管骨が多い)で作られこれで十分孔を開けることができました。なぜあくかというと、「媒材」、つまり「研磨剤」を用いるからです。錐に付着した研磨剤で開けるのです。研磨剤に使われた材料は、翡翠の場合は、砂の石英を集めるか、水晶・翡翠を壊して粉状にしたものか、金剛砂(「続日本紀」に「大阪沙」と記載されている)を使用したといわれています」。また続けて、錐が穿孔できる原理を説明されています、「たとえば錐で木に孔を開けると木屑が出てきます、これで孔があくのです。千枚通しの様に丸いものを回転させても錐屑が出ないので孔はあきません。だから現在の錐は錐屑が出やすいように先端部分が大きくなっています。「管錐」では、孔壁に隙間が有りませんから、中空になっている中に錐屑が出ることで孔があくのです。穿孔途中の孔底を見ると管の中空部分が少し盛り上がった形状になります(写真参考)。これが管錐を使用した痕跡です」。また、実際穿孔すると分かりますが、この盛り上がりで、管の中空部分の閉塞が度々おきてきます、常に錐屑を清掃しなければ穿孔できなくなります。これが錐の原理ですね。

ところで、多くの美しい勾玉はこの方法で穿孔されていません。漏斗状の孔が両側から開けられています。石包丁の紐通し孔をサヌカイト錐であけたときの形状に似ています。ピック状のもので打撃を加えながら撥り飛ばし穿孔したとも考えられています。いずれにしても素材を傷めずに上手に加工しています。まだまだ謎が多いですね。

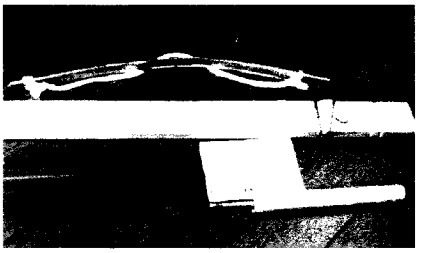
参考に私の弓錐と竹管による翡翠穿孔実験結果を簡単に報告します。

素材・翡翠:穿孔長・17mm:孔・φ5mm:
　　管錐材・竹:研磨剤・金剛砂
作業日数・約1ヶ月:作業延時間・16 時間:
　　竹管錐・5 本:金剛砂使用量・7cc

江上 A 遺跡を参考に作成した実験道具と、穿孔途中の孔底写真を添付しました。



孔底の盛り上がりに注目



穿孔道具一式

小学校総合学習の支援活動

今西　和代

一学期は、土器つくり、勾玉つくり、火熾し、脱穀、炊飯のメニュを南・北・田原本・平野・東小学校六年生の総合学習の支援を行ないました。曇りがちの天候のため苦労しましたが、会員の皆さんのご協力をいただき無事に終えることができました。

二学期の予定は、右表のとおりとなっており、後半の小学校の『総合的な活動の時間』の支援活動も既に始まっています。これらの活動の課題として、野焼きや炊飯の用いる木材・藁の確保です。各小学校校区の工務店や大工さん、および工場から出る廃材を分けてもらっていますが、5時間余り温度を上げての野焼きですから、かなりの量が必要です。また、最後に一定時間、高温を維持するために藁を燃やすのですが、機械化で稲の収穫時には藁を細かく切って田んぼに残しておくので手に入りにくくなっています。

しかし、町内5校の小学校に行くたびに児童たちの感動の声を聞かせてもらい、『喜んでもらって良かった』と次の活動に繋がっています。これからも会員の皆様の参加をお願いします。

月　日	学校	活動	備考
10月　2日	東	土器づくり	終了(5人)
10月　4日	北	土器づくり	終了(8人)
10月11日	平野	火熾し・炊飯	終了(10人)
10月29日	平野	土器の野焼き	終了(8人)
11月　7日	東	土器の野焼き	終了(6人)
11月22日	北	土器の野焼き	
11月26日	東	火熾し・炊飯	

事務局からのお知らせ

1　コスモス畑

例年の通り、今年も唐古・鍵遺跡のコスモス畑の植栽のボランティアをおこないました。7月から4日間早朝から種まきから雑草抜き作業のかいあって、天候に恵まれたからでしょうか。きれいな花が咲きました。 2ページの写真をご覧ください。

2　田原本町文化祭

11月2日(土)13時より、青垣生涯学習センター玄関広場で、「弥生生活体験コーナー」を開設し、50名を超えるこども達が火熾し、穂刈り、脱穀を体験しました。 子供たちは、3ページの写真のとおり、楽しい時間をすごしてくれました。

3　現地説明会

田原本町教育委員会は、十六面・薬王寺遺跡の現地説明会を開催いたしました。遠方の方には、資料を同封いたしております。ご参考ください。また、当日、受付や給茶サービスそして遺物の見守り等のお手伝いをいたしました。

4　磯城の里観光ウォーク

10月20日、「へそーウォーク」が開催され、遺跡楼閣付近で、遺跡の説明をおこないました。当日は、荒天で、ご参加の方も私達ガイドも大変な一日でした。

編集後記

- 特別寄稿は、渡辺やす子さん、鈴木正三さんからいただきました。お忙しいなか、ありがとうございました。
- 奈良盆地も大分寒くなってまいりました。皆さま、ご健康にご留意ください。

編集委員　井上知章　植田洋高　大森初美
谷口敬子　花坂志郎　福島道昭